令和６年度小松市立向本折小学校　学校評価２

	目標・具体的取り組み	取組の状況（中間・８月提出）	取組の成果と課題（年度末・３月提出）
生徒指導	＜あたたかくつよい集団をつくる＞ ・学校の現状にあった学習オリエンテーションを４月は全校一斉に、学期ごとに低、中、高や学年で行い、どのクラスにも学習規律が定着し、落ち着いて学びに向かう集団にする。 ・児童会と連携して、学期ごとに、自己肯定感、自己有用感が高まるようにする取り組みを行い、あたたかい集団にする。 ・不登校を含め、学校生活に不安のある児童の実態把握と教職員との共通理解を図り、有効な手立や対策を考える。 ・集団づくり部会で方策を考え、どの児童も安心して過ごせるあたたかなクラスづくりを学校全体で推進していく。	・全校一斉の学習オリエンテーションを行い、学習規律の共通理解ができた。二学期以降もゆるみがでないように学期始めに現在の実態に合った学習オリエンテーションを行い、落ち着いて学びに向かう集団とする。 ・二学期以降も児童会企画の活動や各学年の活動後の振り返り、ミニレターのやりとりを大切にしていく。 ・長期休業中の校内研修、児童理解の会で個々の共通理解をし、継続して、有効な手立てや対策を考える。 ・学期始めの「みんなでスタート」の項目を担任と児童とで考え、実態に合ったものとし、安心して過ごせるクラスづくりを学校全体で行う。	・学期ごとに、学校の現状にあった学校生活オリエンテーションを行うことで、大切にしたいことを学期初めに確認してから、「みんなでスタート」の取り組みができたのは目標を児童と考えることができて効果的だった。さざなみ議会で話し合った課題についても取り入れることで児童自治につながる。 ・児童会と連携し、あたたかい集団をつくるための取組がたくさんできた。児童も自主的に一生懸命取り組むことができた。 ・学校生活に不安のある児童について細かい共通理解を定期的にすることで、対応を複数で行うことができた。次年度以降も継続できるとよい。ステップルームを設置したことも効果的であった。
児童会	〈児童の主体性を高める〉 ・授業や学校行事などで児童が主体的に活動を計画・実施できるように支援し、児童の主体性を高める。 ・児童会活動では、上学年が活躍できる場をつくり、下学年があこがれる上学年となれるようにする。	・企画委員会で毎日あいさつ運動を行ったことで、自分から気持ちの良いあいさつができる児童が増えた。今後も、明るい楽しい学校にするために継続していく。 ・企画委員会主体で全校で優しい言葉を増やすための取組や全校が楽しめるお祭りを計画、実施したことで、児童の主体性や満足感を高めることができた。 ・上記の活動後に、下学年から上学年にミニレターを書くことで、下学年は上学年に感謝の気持ちをもっていた。 ・今後も、児童主体の活動となるように、目的や見通しをもたせつつ、支援していきたい。	・あいさつ運動を毎朝継続することで、全校児童があいさつをする意識を高められた。良いあいさつを実践している児童を全校放送で紹介することで、良いあいさつが広まった。 ・児童会目標と小中サミットの目標達成に向けて、児童会企画委員会を中心に、児童の考えた取組を実行した。友達のいいところを見つけたり、優しい言葉かけを振り返ったりすることで友達の素敵な部分に気付くきっかけとなった。 ・児童議会で校内の問題を話し合うことで、児童が当事者意識をもって問題に向き合うことができた。普段の活動が下学年の良き手本になっていたが、下学年に上学年の取り組みや頑張りを伝える場があるとさらに良かった。
道徳教育	〈「規則の尊重」を重点目標とし、小さなきまりを大切にする心を育む〉 ・重点目標を校内や教室に掲示し、きまりを守ることへの意識を高める。 ・地域の方・保護者等、外部人材と連携した授業実践を行う。 ・道徳通信で道徳的取り組みを保護者に向けて発信し、地域の方や保護者とともに児童の心を育んでいく。	・教室や職員室前の掲示板に重点目標を掲示したり、小さなきまりの徹底していくことを職員間で共通理解したりしたことで、学校全体でがきまりを守ることへの意識が高まってきた。 ・２学期以降、地域の方や保護者等の外部人材をゲストティーチャーとして招いた授業を実施し、道徳的価値観の育成を図りたい。 ・道徳通信を発行し、授業で扱った題材の内容や児童の振り返りを保護者に伝えた。２学期以降も道徳通信を発行し、学校と家庭が連携して児童の心を育てていけるようにする。	・重点目標の掲示や、重点目標に関連した授業を計画的に実施し、きまりを守ることへの意識を高めることができた。 ・年間指導計画に石川・小松のふるさと教材を位置づけ、計画的に実施することができた。 ・オンライン会議の機能を利用して、アメリカで働く本校の前年度職員をゲストティーチャーとして招聘し、日本と外国の文化の違いや他国と接することへの理解について考えを深めることができた。 ・３学期も道徳通信を発行し、規則について考えの深まった児童の言葉や姿を家庭に伝え、学校と家庭が連携して児童の心を育てていけるようにする。
読書教育	〈読書の質の向上を図る〉 ・さわやかタイム（朝の帯タイム）で学級文庫を読んでチェックシートに記入する。また、担任や図書ボランティアが学級文庫や司書の選書の読み聞かせを行う。 ・学習の関連図書、季節や行事に合わせた図書を紹介し、様々な分野の本に触れる機会をもつ。 ・読書集会で本の紹介をし合うことで、読書のへの関心を高め、選書の幅を広げる。 ・定期的に家庭向けのおたよりを発行し、家庭での読書を推進する。 ・毎月１回、家族読書の日を設定し、親子で本に親しむことで、読書への関心を高める。	・朝学習の時間に学級文庫を読むことを推奨したり、毎月１回図書ボランティアの読み聞かせを実施したりして、児童の読書に対する関心が高まるようにした。 ・司書からの学習内容に関連した本の紹介を適宜行ったり、図書室に季節や行事に合わせたコーナーを作ったりしたことも、児童の読書への関心を高める一助となった。 ・図書委員会の児童が「読書ビンゴ」等のイベントを企画したことで、図書室で本を借りる児童が増えた。 ・定期的に家庭向けのお便りを発行し、保護者の読書に対する意識の向上を図った。しかし、児童アンケートの結果から家庭での読書時間が少ないことが分かった。２学期以降は本を持ち帰らせ、家庭での読書の習慣が身に付くようにしたい。	・朝読書では、どの学級でも静かに時間いっぱい本を読む習慣を定着させることができた。 ・図書委員会の児童が企画した「読書まつり」では、図書館に本を借りに来る児童が増え、年間の目標貸し出し冊数を達成した児童が増えた。 ・異学年との読書集会を行うことで、学級文庫に触れる機会が増え、選書の幅を広げることができた。 ・家庭学習調べの取り組みと併せて１０分読書に取り組むことを推奨した。その結果、家庭でも読書をしようとする児童が少し増えたものの、取組の期間以外にも普段から家庭で読書をする習慣が身に着くような方策を考えなければいけない。
人権教育	〈自分と他者を大切にしようとする心を育む〉 ・異学年で取り組む学習や行事後に、ミニレター形式でふり返りを交流する。 ・道徳や学級活動で、自分や友達の良いところ見つけを行うことを通して、ありのままの自分を受け入れたり、自己肯定感を高めたりできるようにする。 ・校内特別支援委員会と連携を図り、本校在籍の外国ルーツの児童に対する理解を深める職員研修を行う。	・異学年で取り組む学習や行事後の、ミニレターのやりとりが児童の中でもよい習慣となっており、児童アンケートの結果にもつながっていると思われる。さらに高めるため、児童の活躍の場を設定していく。 ・児童会の企画で、「友達の良いところ見つけ」を行い、全校にも発信することができた。二学期以降も児童が企画した取組を進め、自己肯定感、自己有用感を高めていく。 ・本校在籍の外国ルーツの児童についての児童理解の会を行い、対応の際に気をつけることなどの共通理解を図る。	・児童会企画員会が主体となって、人権集会を実施した。企画委員会の児童は「学校に潜むいじめの芽」は相手の心を傷つける言葉であると考え、学級会で話し合ったことを児童議会で集約し、それを元に人権集会で全校児童に啓発する内容を吟味した。児童が自ら考え、児童の言葉で相手の存在を大切にするという人権意識を高められたのが良かった。 ・外国籍児童、特別支援学級に在籍している児童に対する意識の向上についても引き続き啓発をしていかなければいけない。
保健健康教育	＜すこやかな身体を育む＞ ・前年度のスポーツテストの結果で課題となった握力・持久力の向上のため、長縄、準備運動の中での握力向上につながる運動を取り入れる。 ・学期に１度生活チェックを行い、規則正しい生活を見直す機会を設ける。 ・２学期の学校保健委員会で「メディアと健康」をテーマに学習する。	・握力向上につながる準備運動を企画し，２学期以降に体育委員会から発信する。また，長縄週間を設け全校で取り組む。 ・学期に１回の生活チェックから，規則正しい生活は定着しつつある。夏季休業明けに生活習慣を見直すための保健指導を行い，さらに規則正しい生活の定着を図る。 ・学校保健委員会に向けて，「メディアと健康」に関するアンケートを実施し，学校保健委員会での活用を通して，今後のメディアとのつき合い方を見直す機会とする。	・全校で長縄（八の字とび）に取り組み持久力の向上を図った。握力向上のための準備運動は，今後も継続して取り組んでいく。 ・学期１回の生活チェックは，規則正しい生活の定着のためにも次年度も継続していく。 ・学校保健委員会の講演を受けて，家庭でのメディアの使い方を見直す機会を設けた。直後の結果では意識的に取り組んでいたが，冬休み後の結果では全校平均が約77%，高学年の意識は高く継続しているが，低学年はルールづくりから家庭の協力を得る必要があることが分かった。新入生説明会にも資料をもとに説明の機会を設ける。今後も定期的に声をかけ，メディアとのつき合い方について見直す機会を設けていきたい。
情報教育	＜ICT機器を活用して、教科の学びを深める＞ ・年間指導計画やカリキュラムマップを基に、学習用端末が効果的に利用できる場面や活用方法を考え、活用を推進する。 ・ICT機器を活用した授業実践を定期的に共有し、児童の学びを深める授業に繋げる。 ・各学年の発達段階に応じて、プログラミング的思考を養うための授業を行う。	・研究授業で学習用端末を使用した実践を行ったことで、端末の活用場面の幅が広がった。２学期以降も学習用端末を活用した授業を積極的に公開し、教師の端末活用力を高めたい。 ・メディアスキル指導計画表を作成し、各学年で身に付けさせる情報活用能力を明確にした。計画表を指導計画綴りに綴ることで、達成度を確認できるようにした。 ・カリキュラムマップにプログラミング的思考の育成に適した単元がはっきりと分かるようにした。２学期以降も、カリキュラムマップにもとづき、授業実践を進めていく。	・学校評価の「児童生徒は、コンピュータなどのICT機器を、ほかの友達と意見を交換したり、調べたりするために使用している。」の項目の肯定的な回答が、職員が93.8%、児童が91.0%となり、普段の授業の中で学習用端末を活用する機会が増えてきたと言える。 ・授業実践の交流を定期的に行うことができたが、授業での活用場面には偏りが見られる。導入の場面における資料の拡大掲示、資料を児童に配布することなどにおいて効果的に活用している実践が多くあった。しかし、児童同士で考えを交流する場面での活用は少ない。次年度以降は、自分の考えをまとめたり、表現したりするための活用を推進していきたい。
家庭・地域との連携	＜開かれた学校づくりの推進＞ ・授業や特別活動において地域人材を活用し、学習活動の充実を図る。（総合的な学習の時間、道徳、クラブなど） ・各種便りやHP、メール配信等で学校から適切に情報を発信し、家庭や地域との連携に努める。	・トマト栽培、サツマイモの苗植え、神社についての調べ学習等、地域人材の活用で、学びや地域の方とのつながりや地域についての理解を深めることができた。２学期も詩吟や箏の体験等において、地域人材を活用し、学習活動の充実を図っていく。 ・定期的に発行される学校だよりや、ＨＰで学校の様子を伝えている。また、家庭学習についての便りで保護者の理解や協力を仰ぐことができた。メール配信では、新たに資料室を活用することで、行事予定（下校時刻）や献立について知らせることができた。	・２学期は４年生が詩吟を地域の方から学び、学習発表会で立派に成果を発表することができた。地域の図書ボランティアの方による、朝の読み聞かせやお話会では、いろいろなジャンルの本やお話に触れる機会となり、本に親しむきっかけとなった。クラブでは地域の方にご指導いただき、お花の生け方やお茶の点て方を学ぶことができた。今後も地域や外部の人材を活用し、様々な学びにつなげていきたい。 ・保護者アンケートの意見等も参考にしながら、お便り等で学校の情報を地域や家庭に伝えていく。

学校関係者評価	・小さな目標を立て、スモールステップで進め、自分の成長を実感できるようにすると自己肯定感が高まるのではないか。 ・子ども達に目指す姿のイメージをもたせるために、授業交流等で上級生等の良いモデルを見せるとよい。 ・家庭学習についての項目は、保護者の意識を調べることも必要ではないか。家庭の協力を得ながら進めていけるとよい。 ・児童議会に、低学年や中学年が傍聴する機会をもつとよい。上学年の取組をみることが今後のよいモデルになる。 ・ステップルームで、子ども達の安心できる環境づくりができている。人手不足という問題もあるだろうが、心情的な居場所づくりを続けてほしい。 ・読書教育は家庭の影響が大きい。現代は大人も読書よりスマホやSNSを使用している時間が多い。スマホ等の情報と読書をつなげる良い方法があるとよい。 ・人権教育の取組がとてもよい。行事や取組で高まった意識を持続させるために、日頃から子どもの人権に関するアンテナを高くしていかなければならない。 ・情報教育を進め、子ども達が自分の思いや考えをまとめたり、発表したりする力をつけてほしい。